

有戸野の牧はどこにあったのか？

～千年にわたる人と馬の歴史～

平安時代の貴族にとって、あこがれの馬であった「おぶちの駒」を送り出した尾駁の牧はどこにあったのか。そして、尾駁の牧を再興したといわれる「有戸野の牧」、後に盛岡藩の藩営牧場の南部九牧の一つ「七戸通蟻渡戸野ノ図」にかかっている牧場は、どこにあったのか。様々な資料を基にその位置を特定していく。この有戸野は、明治時代には陸軍の軍馬補充部の放牧場として、戦後は開拓と開発の中心として、深く人々の生活にかかわってきました。千年にわたる人と馬の歴史をたどる企画展です。

1 平安貴族が憧れた「おぶちの駒」

みちのくのおぶちの駒も野飼心には 荒れこそまされなつくものは 天曆5年(951) 後撰和歌集 読み人知らず

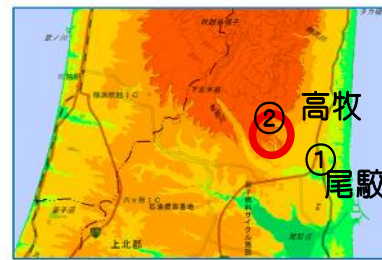
787年(延暦6年)以降、蝦夷の馬を買うことを禁じる太政官符が3回も出されている。陸奥国交易馬として、平安貴族の間で珍重され話題となり、歌枕にもなった。おぶちの駒が詠まれたのが、天曆5年(951)後撰和歌集が最初で、以後、「おぶちの駒」は、斑の動物が神の使いの聖獣として、また、馬格に優れ毛色が美しかったことから都人の憧として、数多く詠まれていったと考えられる。

2 尾駁の駒は、尾が斑か？

- (1)奈良時代から平安時代は、「おぶち」。ア行の「お:o」は於・意・憶などで、ワ行の「を:wo」は小・尾・乎・遠などを語頭に置いて借字していた。
- (2)鎌倉時代は「をぶち」。ア行が「を」に、ワ行が「お」に逆転し、発音は同じ「wo」となる。
- (3)江戸時代の契沖(1695年「和字正濫鈔」)や本居宣長(1776年「字音仮字用格」)が、仮名遣いの誤りを指摘し元に戻した。発音もどちらも「o」となり、ア行「お」の「おぶち」に戻る。

仮名遣いの歴史から、原文の於布知の「おぶち」が、鎌倉から江戸時代に「をぶち」とされ、「を」の借字として「尾」と当て、「をぶち」は「尾が斑な馬」と間違っ て解釈された。「於布知」は尾が斑ではなく、「お斑」と丁寧な意味を込めての接頭語と読める。

3 おぶちの牧は、どこにあったのか？



五日に菅江真澄が戸村を出て、老部川を渡って行くと、高牧の背後に烏帽子岳を①から見ている。現在、尾駁山であるところの②が、高牧(尾駁の牧)と考えられる。

4 東北北部以北は、古代日本国の外



後撰和歌集(951年)で、尾駁の駒が詠われた平安時代の10世紀は、東北北部は、まだ、古代日本国外だった。



5 古墳文化の民がやって来た

古墳時代に各地で古墳を作っていた人々によって、馬は飼われるようになり、7世紀頃から、末期古墳群をつくる民が、青森にもやってきた。馬具出土遺跡は、7世紀代の鹿島沢古墳群(八戸市)・阿光坊古墳群(旧下田町)、8世紀代の丹後平古墳群(八戸市)、9世紀代の浅瀬石遺跡(黒石市)などである。

6 掘立柱付竪穴住居は、馬小屋か？



掘立柱建物はカマド側にあり、煙道をおおうような形で建てられている。この半地下式煙道は、古くは5世紀後葉に、古代の牧があった長野県や群馬県北部あたりに出現。9世紀前半に角鹿市「高市向館遺跡」に見られ、米代川流域から津軽の山間地で見られた。10世紀中葉以降、馬飼いの民が、六ヶ所発茶沢にやって来たのではないかと考えられる。

7 石帯を持っていたのはだれか？



石帯の表面 平安貴族の後ろ側の装束と帯
昭和47年に表館遺跡から出土。これは、平安京で作られたもので、表館の人物が、国司や鎮守府將軍を通して京へ上り、そこで貴族からこの白玉帯を賜与されたのかもしれない。

8 絵図の蟻渡野はどこにあったのか？



蟻渡野の変遷と想定範囲(絵図の牧は青枠か？)

南部藩九牧「七戸通蟻渡野ノ図」の牧の広さを基にすると赤枠①となるが、絵図内の各村々や水流、沼の位置を基にするとかなり広い青枠②の蟻渡野牧が当てはまる。馬が草を求めて移動するため、青枠の広い範囲と絵図はなつたと考えられる。

9 南部氏がやって来た

鎌倉時代を通して、青森県下は、ほぼ北条氏の得宗領となる。南部氏は、北条氏の側近に名を連ねていたことから、甲斐で培った馬牧の管理のノウハウを買われて、糠部に所領を得ていたと思われる。

鎌倉幕府が滅びると、根城の南部師行と政長兄弟が、南朝勢力の主力として活躍。その後、北朝方の三戸南部氏が北東北に広大な領土を広げていく。

10 南部九牧の起こり

- ① 相内野:慶長18年(1613)野守是与七郎。
- ② 住谷野:元和元年(1615)地頭泉山弥七郎。
- ③ 木崎野:寛永7年(1630)小比類巻助右衛門。
- ④ 奥戸野:寛永16年(1639)御野となる。
- ⑤ 又重野:正保3年(1646)御野となり、元禄



17年(1704)茂右衛門と九左衛門が御野馬別当。

- ⑥ 大間野:正保3年(1646)御野となり、享保5年(1720)大間(野守源三郎)と奥戸(野守四郎右衛門)が一牧になり、宝暦(1751~)頃二牧となる。
- ⑦ 三崎野:明暦4年(1658)別当三光院を野守に。
- ⑧ 北野牧:寛文4年(1664)寛兵衛を野守に。
- ⑨ 蟻渡野:寛文12年(1672)兵蔵が別当に。



「七戸通蟻渡野ノ図」 岩手県立図書館蔵



「蟻渡野」の位置 出典:地理院地図

11 野(牧)の年中行事(御野馬別当の仕事)

御野馬別当は、2月下旬から、肥料供給とダニ駆除のための野焼きの「焼切り」や土手の修繕などの普請を行い、各野(牧)の「野放し」放牧の時期決定とその立ち合いをする。また、各野の見分(巡検)と絵図の作成、各野の馬見役が実施する馬数・失馬・紛れ馬・狼害等の報告を受けての調査と処理を行っていた。7月中旬ころからは、野取りへの立ち合いが始まり、その他にも、野守と名子達の生活維持と救済を行っていた。

12 宝暦12年4月の土手建設工事(土手普請)

各野(各牧場)では、4月に入り野火が行われ、中旬には馬の放牧が始まる。15日は住谷野、16日は相内野、17日は有戸野。ほとんど同時に新古の土手普請も行っていた。有戸野での土手普請では、土手の長さ計642間で、1間につき人足3人、1日につき200人で合計1,926人、日数は10日。もう一つは11日で延べ2,126人の工事に、積上げもあった。

春の農作業もあり、村々の負担は、大変なものであったことがわかる。



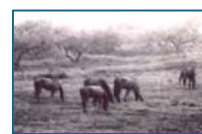
新庄平近くの土壁跡

13 地名の由来「木村文書:蟻渡野発端」より

江戸時代に有戸野の野守木村家に伝わる伝承。「鞍を打っていたから倉内。馬を引くのに泊まったから泊。生れ出たところが出戸。尾がブチの馬がいたので尾駮。鷹待場の架の高さと同じだったので鷹架村。」



二又地区の馬耕の様子



軍馬の放牧場



八森地区の大草原